

能代高

(38)

わが師 わが友

「人間、希望持つて、その気でがんばれば、やれるもんだし……」

柴田正男（1期、舞踊教師）の口ぐせだった。能高（能中）卒業生一万人の中でも、異色の人物といつていい。

「オレ、卒業したら、舞踊家になるぞ」

柴田は胸を張った。

同級の畠山哲也（元能代檜山中校長）たちは

「おお、いいもんだな。でもなれるべがな」

うらやましき半分、ホントになれるかなという気持も。

ところが、彼は、ついに初志

貫徹。いつのまにか、日劇ダンシングチームに加わり、あの大舞台で、七色のライトを浴びているではないか。

そういえば、柴田はモダン・ボーイそのものだった。

スソがふくらんだラッパズボン。たけのやや短い上着。中学生のころから、他の生徒にはないカッコ良さを持ちあわせた。

あれが、柴田を踊の世界へ誘ったきっかけだったのか——

というのは、郷土出身の大舞踊家、石井漠の舞踊が能代・大正館で行われ、この時、能中の全校生徒が観賞した。人間釈迦、というすばらしい踊り。

柴田はすっかり感銘して上京、すぐその足で、石井の門をたたいた。小学校の校長をしていた父親は、大学に行くとはかり思つて、息子を上京させたという。

「やっぱり、彼らしいな」

畠山は、そう思った。

親友の吉武栄一（1期、能代市義）は、昭和十八年ごろ、柴田を日劇の楽屋に訪ねた。

「やあ、お前、おもしろいことやつてるな」

「お前、まだ生きていたのが……」

あすの命も知れない戦時中。話は尽きなかった。

佐藤真一（新2期、日立電線）——熊谷忠一先生（5期、能高教頭）が忘れない教え子の一人である。

佐藤は、昭和十九年の入学。幼年学校受験のために特訓を受けていた。二十人ぐらい幼年学校に進めたい……吉田慶助校長の意気込みもすごかった。

だが、二十年八月終戦。その時の佐藤と熊谷先生の会話。

「先生、目標ねぐなつたす」

「んだ、戦争終わったもんな」

「じゃあ、次にむずがし学校どこだべ？」

「んだな、一高だな」

「オレ、一高めざして、勉強するぞ」

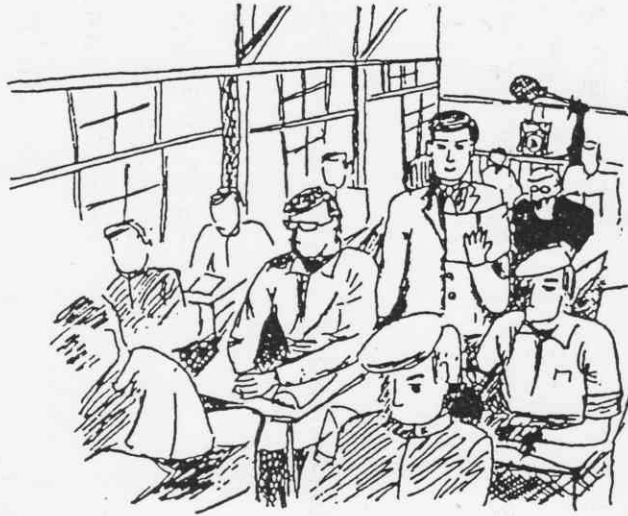
その一高も、学制改革があつて受験することなく、結局、東大を受験。もちろん楽々とパスした。

佐藤は、英語の辞書を一日二ページの割合で暗記した。暗記ずみのページは、トイレトベーパーに活用したとかしないとか。優秀な生徒は、どこか違う。

高橋一郎校長——昭和十六年から十八年まで能中に勤務、生徒の信望が極めて厚かった。生徒をこよなく愛した。

寄宿舎の舎生は、近くのナシ畑へしばしば失敬に行く。

ある日、農家の人がすごい剣幕で校長室へかけ込んだ。



さし絵は平川賢悦（新22期・能代市役所）

「おめほの生徒、オレのナシ畑さ入って、ナシうんともだど……」

高橋校長少しもあわてず

「そんな生徒だば、オラほにいね」

すると、農家の人

「このとおり、証拠残ごしてあるど」

能中生の帽子を取り出してみせた。それでも高橋校長は

「その帽子、どつからか飛んで来たもんだべ」

ガンとして突っぱねた。

そこまでする校長は、ちょっといいだろう。校長先生にあんなつらい思いをさせてはいけない……それからというもののナシ畑へ行く生徒はいなくなつた。

高橋校長は、生徒と一緒になつて校内をそうじした。パタパタ……はたきかけがうまい。

校長室には、来客用の菓子が時々残つていた。そうじ当番はこの菓子が味わえた。

「きょう、菓子、あつべがな……」

こんな楽しみがあるので、そうじも苦にならない。

小沢美喜雄（能代市教委）、平野茂次郎（山田製パン）、石井登（秋田営林局）、内田真（能代四小）、保坂常雄（保坂銘板）、木村春男（医師）……いずれも18期Ⅱらは、校長室をそうじした一年生のころのことが、甘くなつかしい。

（敬称略）